

「チベット文明とヒンズー文明の比較研究に

ついて」

——前近代の諸文明の諸問題——

東京工業大学教授 川喜田二郎

日本人によるヒマラヤ民族の記述は河口慧海を最初（一八九九）とし、民族学的関心での調査研究は私（一九五三）がスタートした。ヒマラヤ諸民族の比較研究を、中部ネパールの Kail Gandaki 溪谷沿い周辺を狙い、チベット高原のチベット族（Tb.: Pöpa; Np. Bhotiya）から北インドのガンジス平野のヒンズー・カースト社会まで、鋸を入れたような切断面に沿って行なおうという方針である。この部分に沿う諸民族を北から南に並べると、チベット族・チベット化された正体不明の山岳民族・Punel はか五カ村地帯という土着チベット化民族・Thakali 族・Gurung 族・Magar 族・ヒマラヤのヒンズーカースト社会・Tharu 族・北インドの本格的ヒンズー社会、という順になる。これら諸民族から、代表的な村落社会をそれぞれえらび、各村数カ月の集約的なコミュニティ・スタディーを行ない、その上で比較を試みる方針である。しかし三度の現地調査で一応集約的に行なえたの

は、チベット族・Magar 族・ヒンズーのヒマラヤ村落の三者のみであり、他は二・三の民族につき予察調査を行なった程度である。

まず一九五三年に広域の文化景観調査を行なったが、このとき宗教景観が文化領域の確定に有効なことを発見した。一例をあげれば、積石塚（Tb.: lapse）はチベット文化圏のよい指標であると共に、蒙古の obo にまで一連の分布をなしている。地域は、海拔二〇〇m 以下のヒンズー文化圏、三〇〇m 以上のチベット文化圏、および、両者の中間の部族文化とヒンズーもしくはチベット文化との混淆地帯の三者に大わけできる。

この間に、海拔高度別に文化が带状に変遷する事実を発見し、J. Steward 教授らのいわゆる文化生態学のアプローチに大いに食指を動かした。言語・服飾・流行歌などは同高度沿いに東西に伝播する傾向がある。これを思えば、ネパール領がグルカ王朝下になぜ東西に細長く伸びたかも、単に政治史的説明では尽くせぬものがある。更に、ヒンズー・チベット両文化は高文化もしくは文明というべく、部族的文化より一次元高いものと判る。高文化を森林の喬木層にたとえれば、部族文化は灌木林のようなものであり、チベット圏やヒンズー圏の地方土俗文化は森林の下生えのようなものである。Magar 族の現在の文化は、灌木林の間にヒンズー文化とい

う喬木疎林が侵入したような重層構造をもっている。

以上のほかに、ネパール盆地の文化はボケット状の高文化のようなもので、今日では国内に強い影響を及ぼしつつある。ヒマラヤ沿いには、西のカシュミール盆地、西ネパールの Jumla 盆地、アッサムヒマラヤの Apa Tani 盆地などに、ボケット状に早熟な文化が発達する傾向があり、その比較研究が興味あるテーマをなすだろうと私は示唆したことがある。半都市文化（半部族的・半高文化的）ともいべきヒマラヤ土着民族文化には、興味ある未知の諸テーマがある。

Pön 教問題はその一例で、私が一九五八年 Tseta 村で調べた Pön 教徒は、チベット文化圏でラマと妥協した白ボン教 Pönkar であった。ところが一九六三年に Punel 族の村で調べた黒ボン教 Pön-nak は、チベット文化圏からみていわば化外の Pön 教である。イトスギ・岩・Om という真言・豊饒饒儀などが複合をなしている。あるいは、既に遠い過去に亡びた古代的文化の影響下の残存かもしれない。Pön 教にについては Hoffmann・Snellgrove らの宗教学的研究のみならず、民族学の側からも寄与する余地が多そうである。同様な意味で Magar 族その他の諸民族の間に拡がっている Kharapkye 神々話なども、おもしろい文化史的テーマになるかもしれない。ネパール盆地に早期に根を下ろしたであろうネパール仏教が、周辺山地民にどれだけ影響を及ぼしたか

も、未知の課題であろう。

このように、ヒンズー・チベット両高文化に属さない現象をすべて部族文化と断するのは早計であり、死滅した過去の高文化の存在を考慮のうちに入れた方が安全である。

高文化間のパターンの比較は、特にチベット文化に未熟な誤解の多い現在、有益であつた。チベット文化パターンを機能主義的に見ると、住民の高い移動性・鋭い直観主義・宗教と商業の強い結合（高僧の存否で村の盛衰すらきまることあり）・鳥葬に含まれた宗教観・チベット文化の二分構造などが、興味ある諸テーマを示唆した。ことに有名な一妻多夫については、社会人類学的な解明がかなり進められそうである。暫定的結論としては、チベット人の間に一妻多夫が多いが、一妻多夫制というものはない。また彼らの間に多い交叉イトロ婚と、Magar 族あたりの「好ましい交叉イトロ婚」や掠奪擬制婚との間には、興味ある推移がある。

チベット高文化の発生的把握とヒンズー高文化との比較パターン論とは、最も魅力的なテーマのひとつといえよう。

第二三回 一〇月三〇日

「東京大学イラク・イラン遺跡調査団の十年」

東京大学名誉教授 江上波夫
札幌大学教授

東京大学イラク・イラン遺跡調査団は、一九五六年より六